

【短 報】

大学1年生の柔道整復術に対する意識調査

廣瀬 文彦¹⁾, 久保山和彦²⁾, 猪越 孝治²⁾¹⁾ 日本体育大学一般研究員²⁾ 日本体育大学運動器外傷学研究室

A survey on attitude toward Judo therapy among university freshmen

Fumihiko HIROSE, Kazuhiko KUBOYAMA and Takaharu INOKOSHI

(Received November 2, 2015 Accepted: January 28, 2016)

Key words: Training of Judo therapy, Judo therapy, Judo therapy-treatment, Hand-treatment, questionnaire survey**キーワード:** 柔道整復師養成, 柔道整復術, 後療法, 手技療法, アンケート調査

I. 緒 言

これまでに、柔道整復師養成大学生を対象とした調査は、それぞれの養成大学や専門学校で多数行われてきた。それらは、大学生と専門学校生における進路希望に対する意識の違い^{1,2)}、大学生の入学時の進路希望に対する意識^{3,4)}を調査することを目的としているため、ここから判ることは、柔道整復師免許取得後の進路に絞られており、学生が柔道整復術に対してどのような認識を持っているのかということではない。

柔道整復術という施術は整復法、固定法、後療法の3方法に分けることができるが、その中でも後療法は現代の柔道整復師が行う施術の中で社会的ニーズの高い療法となっている。その後療法をさらに分けると、手技療法、運動療法、物理療法の3方法に分けることができる⁵⁾。柔道整復術は柔術活法に起源をもっているとされ、柔術活法とは柔道の「絞め技」により「落ちた患者」を蘇生させる方法として用いられてきた⁶⁾が、明治中期に柔術家は庶民を対象に柔道家が接骨術を盛んに用いていたことから⁷⁾接骨術という名を付されたことで現代の活法につながっている。元来、柔道で受傷した骨や関節の治療の他に筋、腱などの軟部組織の治療も行われていたために、現代の接骨院においてもこの流れを受け継いでいる面が多分にみられる。しかし、柔道整復師養成学校での教材内容は、国家試験に合格するための基礎医学および臨床科目（柔道整復）などの理論教科が中心となっており、施術（治療

表1 対象者の性別人数（人）

	人数（人）	割合（%）
男性	47	61.0
女性	30	39.0
合計	77	100.0

技術）の教材は十分とはいえない。

そこで本研究は、学生が柔道整復術についてどのように捉えているのかを把握するために、接骨院などで患者ニーズの高い後療法に絞ったアンケート調査を学生に実施することによって、在学中の教育内容や卒業後の進路指導に役立つ基礎資料を得ることを目的とした。

II. 方 法

1. 対象者

柔道整復師養成大学であるN大学の1年生に柔道整復術について質問紙を配布し、無記名でアンケート調査を行い、回答を得ることができた77名（男子47名、女子30名）を対象とした（表1）。

2. 調査日

平成27年10月22日（木）3時限講義時間中に行った。

3. アンケート内容

対象者の性別、また柔道整復術の施術法における後

表2 1番目に重要な後療法（性別）

		後療法			合 計
		手技	運動	物理	
男	人数（人）	28	19	0	47
	割合（％）	59.6	40.4	0.0	100.0
女	人数（人）	20	6	4	30
	割合（％）	66.7	20.0	13.3	100.0
合計	人数（人）	48	25	4	77
	割合（％）	62.3	32.5	5.2	100.0

P=0.0781, P<0.05

療法のうち、「手技療法」「運動療法」「物理療法」の重要性を順位付けした回答を求めた。また、1番目に重要と答えた療法に関しては、その選定理由について自由に記させた（表2）。

4. 集計方法

回答者の「手技療法」「運動療法」「物理療法」の順位付けについて単純集計した。

5. 研究倫理

本研究は日本体育大学倫理審査委員会の承認（承認番号第015-H65）を得て実施した。

Ⅲ. 結果および考察

回答が得られた学生のうち、1番目に重要な後療法は手技療法48名（62.3％）、次いで運動療法25名（32.5％）、物理療法4名（5.2％）であり、手技療法を最も重要性のある療法であると答えていた（図1）。また、その他の結果については、2番目に重要な後療法は手技療法26名（33.8％）、次いで運動療法43名（55.8％）、物理療法8名（10.4％）であり（図2）、3番目に重要な後療法は手技療法3名（3.9％）、次いで運動療法10名（13.0％）、物理療法64名（83.1％）であった（図3）。

手技療法が1番目に重要であると回答した学生は、これまでの自身の柔道整復術の受診経験から、柔道整復術を受けると、「まずは身体を触れてもらいながら患部の状態や治療までの経過の説明を受けたこと（アンケートに記載されていた回答より）」が好意的に受け止められた事が回答に影響したものと考えられる。

次に、運動療法が手技療法に次いで2番目に重要であると答えている点が注目される。現代の接骨院では、運動療法を行なうことは少ないとみられる⁹⁾が、温熱療法や電気療法などの物理療法より重要であると答えていることである。この結果は、今回のアンケート対象の学生が運動経験の多い体育大学に所属していることが影響したものと考えられる。

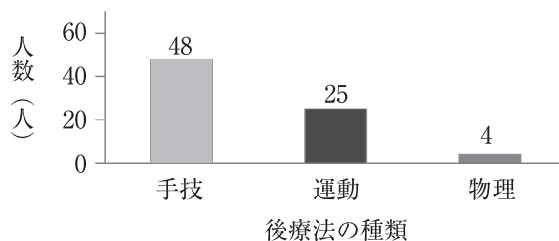


図1 1番目に重要な後療法

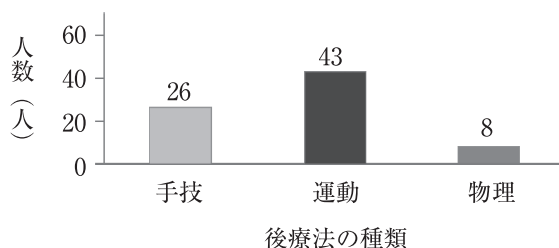


図2 2番目に重要な後療法

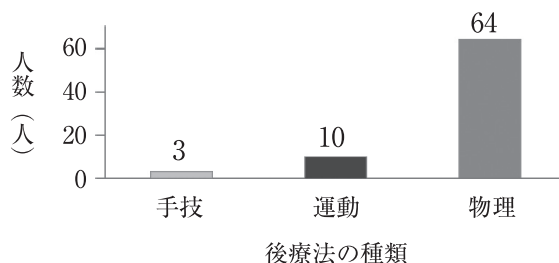


図3 3番目に重要な後療法

3番目にあげられた物理療法は、手技療法、運動療法とは異なり、医療機器を必要とする療法であるため、施術者の技術的側面を評価するものではない。そのため今回最も低い回答となっていたのは、本調査では明確とされなかったため、学生が物理療法をどのように位置づけているのかを調査する必要がある。

Ⅳ. 結 論

本アンケート調査によって学生の後療法に関する認識調査をおこなった結果、後療法のうち「手技療法」を最も重要と答えていた。このことから、柔道整復師養成大学生（1年生）の柔道整復術に対する認識の一端を知ることができた。

しかしながら、この「手技療法」の教材は、『柔道整復学・理論編』（柔道整復学講義で用いられる教科書）において、名称を紹介するのみとなっており、実際の実技内容が詳細に記載されていない⁵⁾。そのため、授業（実技含む）で「手技療法」を扱う養成学校は少ないものとみられ、本アンケート調査で判った学生の認識との明らかな齟齬がみられた。

今後は「手技療法」の重要性について詳細に検討するための調査用紙の妥当性を検討し、なぜ「手技療法」

を重要としたのかを詳細に考察しようと考えている。さらに、資格取得後の就業柔道整復師の後療法の重要な順番を調査し、学生の認識との違いを比較することによって、在学中の教育(教材)内容や卒業後の進路指導に役立たせることを目的として調査を継続したい。

V. 参考文献

- 1) 服部辰広, 久保山和彦, 樋口毅史, 松田康宏, 伊藤譲. 柔道整復師養成課程に所属する大学生と専門学校生の柔道整復師に対する意識の相違について. 日本体育大学紀要. 2015, 44(2), p. 77-85
- 2) 廣瀬文彦, 松村智弘, 猪越孝治, 飯出一秀. 柔道整復師を養成する大学と専門学校の学生の意識調査の比較 2014 年度新入生. 環太平洋大学研究紀要. 2015, 9, p. 279-282
- 3) 廣瀬文彦, 前原亜美, 松村智弘, 河合洋二郎, 實戸崇史, 井上陽子. 柔道整復師を養成する大学の学生の意識調査—2013 年度新入生—. 環太平洋大学研究

紀要. 2014, 8, p. 265-270

- 4) 廣瀬文彦. 大学柔道整復科新入生の意識調査—2008 年度入学—. 帝京大学スポーツ医療研究. 2009. 創刊号, p. 33-38
- 5) 全国柔道整復学校協会編. 柔道整復学・理論編. 改訂第 5 版, 南江堂, 2009, p. 5 p. 101-103
- 6) 久保山和彦. 活法研究; 楊心流柔術巻物の史料調査. 日本体育大学紀要. 2014, 44(1), p. 1-7
- 7) 久保山和彦. 江戸の逮捕術から明治期「体操化」の試み「骨接ぎ(接骨)」にいたるまで. 月刊秘伝. 2015, 11 月号, p. 20-23
- 8) 社団法人全国柔道整復学校協会. 柔道整復師養成施設卒業生進路状況アンケート調査. 2011, p. 13

〈連絡先〉

著者名: 廣瀬文彦

住 所: 神奈川県横浜市青葉区鴨志田町 1221-1

所 属: 日本体育大学一般研究員

E-mail アドレス: fhirose@nittai.ac.jp